

近代の観光と郷土意識

昭和2（1927）年。

この地域にとって、この年は画期的な年となりました。2月、それまで船で渡っていた木曾川に「太田橋」が架けられ、飛騨川の青柳橋が木製から鉄橋に変わりました。自動車時代の幕開けです。鉄道も徐々に整備され、人々の動きも活発になっていきました。

国民の生活に少しゆとりができたことを背景に、また、昭和という新時代にあわせて昭和2年5月に新聞社が設けた「日本新八景」の募集に全国が熱狂し、その河川の部門で木曾川が第1位に選ばれました。それを機に、すでに始まっていた木曾川の観光「ライン下り」事業が飛躍的に進みブランド化されていきます。また、同年に制定された「岐阜縣下新十名所」に「日本奥ライン小山観音」（3位）「蜂屋瑞林寺」（5位）が選ばれて広く紹介され、観光客も増えました。「名所」を生かした地域の観光開発とともに、庶民の間に「郷土意識」が強まっていく時代でもありました。



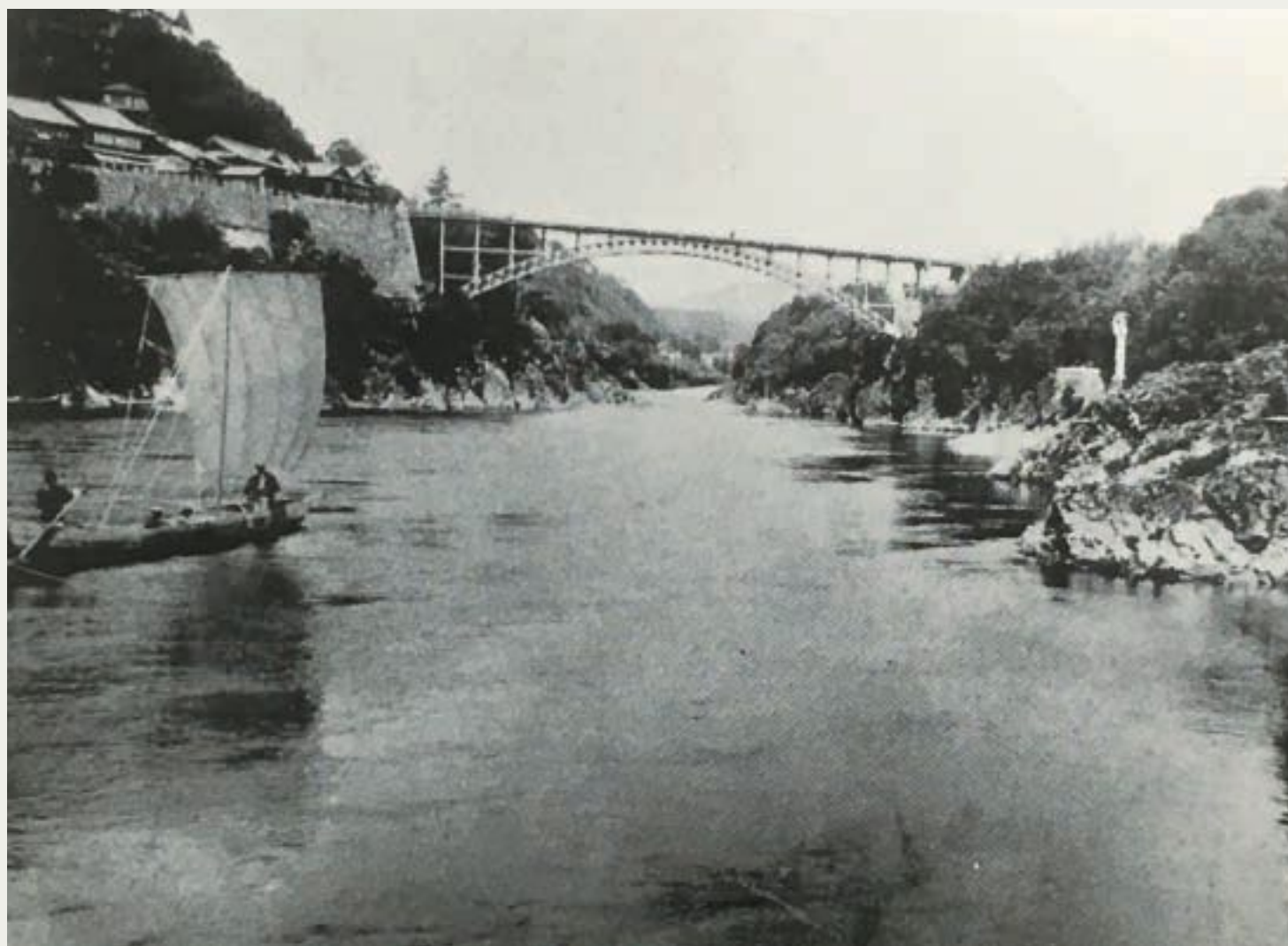
「ライン下りは太田から ポスター」 1928(昭和3)年
(鳥瞰図原画:吉田初三郎／太田保勝会・鉄道省作成)



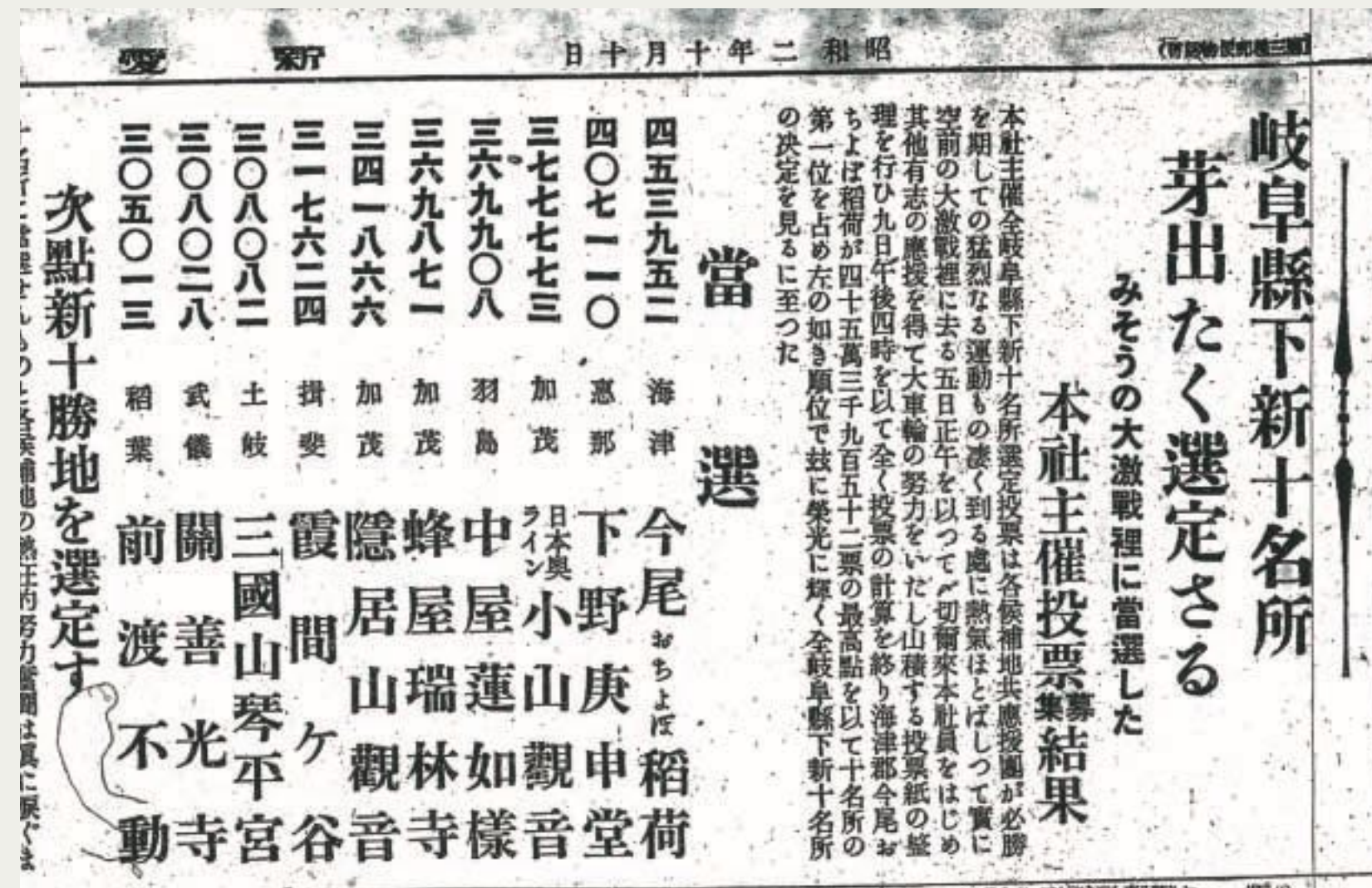
日本八景決定の新聞記事 1927(昭和2)年7月6日付
(河川の部 木曾川)



太田からの日本ライン乗船風景 時期不明



古井からの乗船場と青柳橋 1927(昭和2)年ころ



岐阜縣下新十名所決定の新聞記事 1927(昭和2)年10月10日付
(3位 日本奥ライン小山観音、5位 蜂屋瑞林寺)